ヘルムート・グリュック／ホルガー・クラッテ／
ヴラディミール・スパーチル／リビシェ・スパーチロヴァー著

『15世紀より1918年に至るまでのボヘミア並びにモラビアにおけるドイツ語教科書』

松　岡　　弘

はじめに

前号（『言語文化』39巻）において評者は，ハンネローレ・ブルガーの著書『1867年から1918年までのオーストリアの教育制度における言語権と言語の平等』（1995年。オーストリア科学アカデミー刊）を取り上げ，特に，ハプスブルク朝支配下のチェコ（ボヘミアとモラビア）の小学校で教授言語（＝第1言語）とされたのは何語なのか，その場合に第2言語教育はどう位置づけられたか，そしてそのことによって実際の教育・学習環境はどのように変化していったかといった点を中心に要約と考察を行なった。ただブルガーのこの書は，チェコのみならず当時のハプスブルク朝下の全地域を対象とした包括的なものであるものの，そこで実際にどのような教材が用いられ，どのような方法で言語教育が実施されたかについての記述を含んでいなかった。今回対象とする表題の書（以下，本書とする）は，この間に第2言語としてのドイツ語教育において用いられた教科書・教材の全容をほぼ明らかにした文献解題であり，ブルガーの書が扱わなかった部分を補うものといってよい。

本稿は，本書の意義を論ずるものであるが，時期を同じくして著者ら（以下，著者とする）を主要執筆者とする論文集[1]が，本書に続く叢書の中の第3巻として刊行されており，就中リビシェ・スパーチロヴァー教授の論文[2]は，本書の内容と直接的な関係をもつので，同教授の論文をも参考にしつつまとめることにしたい。なお評者は，2003年3月にチェコ・モラビアのプシェロフ市にあるコメンスキー博物館で，本書で解説されている教科書・教材の多くを実際に手にとって調査する機会を得，続いてオロモーツ大学にスパーチロヴァー教授を訪ね，意見交換することができた。そこで得られたことも生かしての書評であることを，初めにお断りしておきたい。

概要

本書は，ボヘミア王国時代から1918年の第一次チェコ共和国成立までの，現在のチェコ共

和国にあたるボヘミアとモラビアの学校で用いられた，(自習用も含む) ドイツ語教科書・教材，計 499 点の文献目録及び解題である。ドイツのバンベルク大学とチェコのオロモーツ (ドイツ名オルミュッツ) 大学の共同研究の成果であり，「外国語としてのドイツ語の歴史」(Die Geschichte des Deutschen als Fremdsprache) 叢書第 2 巻として 2002 年に刊行された。

文献解題の部を中心に，その前に序論と概要，利用方法，記号の説明 (32 頁) があり，巻末の索引等を含めての総頁数は 290 頁である。著者によると，本書はこの地域でのドイツ語習得に用いられた教材に関する最初の調査記録の集成であり，その主たる目的は社会史的・文化史的にまたは言語史的に価値が低く見られがちなこの分野を解明することだという。(この部分は短く述べられているだけであるが，著者の思いと決意を示していて評者には興味深い。第 2 言語の教育，そのための教科書，そのための教育方法論といえば，いかにも学問的レベルが低いようにみなされ，継子扱いを受ける。一方それが言語政策研究等の対象として取り上げられると，帝国的支配強化の道具としての面が過度に強調される，洋の東西を問わぬ手前勝手な風潮への異議申立てでもあろう。)

著者は序論の前半で，ボヘミア王国ではドイツ語は千年にわたって特別な位置を占め，11 世紀にはドイツ語を話す商人たちがこの地で商売に従事していたという歴史の記述から始め，その後のボヘミアにおいて使用され，教えられた言語について概観する。そしてボヘミアには，チェコ語とドイツ語との 2 言語併用 (バイリンガル) が住民の大半において成立しており，ドイツ語は外国語というよりもある人々にとっては母語，その他の民衆の多くにとっては第 2 言語であって，両言語習得のための自然でコミュニカティブな条件が存在したという。ただドイツ語には，17 世紀から 19 世紀半ばにかけてプレステージ言語という社会言語学的役割は課せられていたが。

こうした認識の下に著者は，宗教界においてのみならず高等教育上の必須言語であったラテン語教育 (18 世紀まではそうであった) にも触れながら，20 世紀初頭までのドイツ語教育や学習の現状を当時の政治情勢や言語政策とも関連させて解説するが，著者の眼目は教材・教授法であるため，これらの点はそれほど詳しくは記述されていない。そして序論の後半では，文献目録に入った教科書・教材がそれぞれに拠って立つ教授法の発展と展開について，特に 1740 年 (女帝マリア・テレージアの即位の年) から 1918 年までのチェコ人児童対象のドイツ語の授業で公的，あるいは任意に採用された教授法を大きく 3 つに分類し，その特徴と普及の様子を述べる。その 3 つの教授法とは，

1)　文法中心の教授法 (いわゆる「文法翻訳法」) Grammatikzentrierte Methoden

これはさらに

Systematische Grammatik (組織的文法)

伝統的なラテン語，ギリシャ語の教え方をそのまま適用した教授法。

Systematische praktische Grammatik (組織的実用的文法)

文法事項は品詞別に分類提示され，文法事項は説明によってでなく実際的な練習として提示される。マイディンガー (Johann Valentin Meidinger) が主唱者。

Methodische Grammatik（方法論的文法）

さらにより児童向きの文法。メタ言語的説明はなく，文法事項は例で示される。主唱者はザイデンシュツッカー（Heinrich Seidenstücker）。

Elementare Grammatik（基本文法）

主唱者はプレッツ（Karl Ploetz）。まず規則が示され，次に例文が，続いてその都度，文法説明がなされ，最後に実践的な翻訳練習が課される。

（以上の教授法に従ったとされる教科書例は文献目録の通し番号で示されているので，そこを当たれば教科書構成等が具体的にわかるが，ここでは省略）

2）「自然教授法」（「ナチュラル・メソッド」Natürliche Methode）

いわゆる「直接法」direkte Methode でもあるが，チェコの学校では直接法は効果を挙げず定着しなかったと，著者は切って捨てている。これについては後でも触れる。

3）「橋渡し，あるいは中道（なかのみち）教授法」Vermittelnde Methode

"Vermitteln"（「仲介する」の意）は，英米中心の言語教授法の中では登場しない用語であり，それを「橋渡し」あるいは「中道（なかのみち）」のどちらの訳が適切か評者には自信がないが，それはそれとして，著者によると他のどれよりも成果を挙げたのはこの教授法であり，間違いなく1918年以前のボヘミアにおけるドイツ語教授法の最高到達点であるという。この教授法の特徴等については考察のところで詳しく論じる。

取り上げられた教科書・教材について

本書の中心をなすのは紛れもなく，255頁に及ぶ全449点の教材・教科書の内容並びに構成に関する分析と解説である。それらは刊行順に並べられていて，通し番号1に置かれているのは，1420年以後の刊行とされる『ラテン語—イタリア語—チェコ語—ドイツ語4言語対照の単語集』である。これは商人や旅行者を対象としたもので，テーブル式に単語が並べられ，テーマ別に構成されていること，代名詞の用法などに関し簡単な文法説明があること，テーマとしては仕事場，家庭内，職業，人体，動物・植物名などが選ばれていること等が紹介されている。つまり現代のわれわれが教材分析に考えるのとほぼ同じ手法・視点で，過去500年間の刊行物が分析・解説されているのである。

なお，本書のタイトルの日本語訳を評者は「……ドイツ語教科書」とし，本稿中では「教科書・教材」とも言い変えているが，499点の中身は教科書だけではなく，会話集，単語集，術語集，辞書，旅行案内，文法書，練習帳など，ドイツ語を教え・学ぶことに利用された全ての資料が含まれる。実物はチェコやドイツ国内の図書館に所蔵されるものが大部分であるが，通し番号1の文献のように，ローマのバチカン図書館所蔵のものもある。文献毎に図書館名とカタログ番号が示されているので，現物に達することは難しいことではない。参考までに大きく年代を区切って，その間の刊行点数を挙げておこう。

1500年まで	5点	1600年まで	37点
1700年まで	14点	1800年まで	43点

1850年まで　　49点　　1900年まで　　150点

1918年まで　　162点

これを見ると1世紀毎に区切った中で17世紀の刊行点数が少ないのが目立つが，この世紀はチェコがハプスブルクの支配に屈することになったチェコ人にとっての「暗い」時代であるから，理解できないことではない。しかし一方，『大教授学』の著者でもあり，チェコ民衆の教師として敬愛されるコメニウスが，国外追放の中でその後全ヨーロッパで用いられる言語教科書を執筆した世紀でもあったのだ。他方，19世紀後半から20世紀にかけての刊行点数は圧倒的である。時代が新しいのだから当然でもあるが，これは前述のブルガーが対象とした，憲法上チェコ語とドイツ語に同等の権利が保証された時期と重なっていることも考慮に入れる必要があろう。

各文献の構成と解説は以下のようになっている。まず，学術資料としての基本的な情報（書名，編著者名，刊行年，実物の所在地）が示され，次に，著者による解説項目として，a）献辞・前書き，b）対象，c）本文の構成と内容，d）教授法，e）文法事項，f）話題，さらに関連文献等があれば，最後に加えられている。

本書の利用方法であるが，一般的には第2言語としてのドイツ語がどのように教えられ学ばれたか，具体的にはどんな文法事項が，どんな範疇の語彙を使って，どんなテーマの下で教えられたかを，500年の歴史の中で知ることができる。

日本語教育を担当する評者の場合は，個別の言語にとらわれない言語教授法そのものへの関心が基本にあってそこから前述のコメニウスの教授学に引きつけられていたのであるが，その普遍的な教授理念と教授法が，コメニウスの母国のチェコの教育現場に果たして実際に取り入れられたことがあるのか，もしあるとすれば，それはどのように実践され継承されてきたのかを知りたいと思っていた。その意味で本書は，評者の疑問と期待に十分に応えるものであった。従って以下の考察では，教授法にポイントを絞って考察を進めることにする。

考察

教授法と教科書・教材は互いが互いに依拠し，互いを方向づける関係にある。しかし，教科書の作成者は必ずしも，自分の拠って立つ教授法の理念とその手順・教授方法とを明確にかつ具体的に指示しているわけではない。本書中の各文献についても，それが書名や献辞・前書きからはっきりと特定できるものもあれば，著者の分析・推論により位置付けられたものもあり，そこには現代の教授法分析の視点が加味されている。それと同じように本考察でも評者の視点からの整理とならざるを得ないが，ここでは著者が序論で特に言及し，また，その分析・推論によって明らかになったと思われるボヘミア・モラビアにおけるドイツ語教科書・教材の特質を，4つのキーワード，すなわち1）「橋渡し・中道（なかのみち）」教授法，2）コメニウス，3）バイリンガル，4）専門化，に限定して考察する。

1）「橋渡し・中道（なかのみち）教授法」（Vermittelnde Methode）

著者によると，18世紀まではラテン語学習方式に倣った伝統的な教授法が続き，19世紀に入って文法中心の教授法と直接法との間の中間の道（Mittelweg）が模索されるようになり，教科書を通じて旧来のあり方が次第に克服されていったのであるが，そのような教科書の元となった教授概念がVermittelnde Methodeであるという。その意味では，文法翻訳法と直接法との間の〈中間〉の教授法であり，「中道（なかのみち）教授法」である。一方，vermittelnを，文法翻訳法と直接法の間を〈仲介する〉ものと解釈すれば，「橋渡し教授法」と称することも可能である。

著者は，この教授法の目標，理念，特徴として，①口答によるコミュニケーション能力養成を優先する，②文字の指導と練習は早過ぎてはいけない，③母語から学習言語への翻訳は有害である，を挙げ，その他に④語彙習得に絵を活用する，⑤文法は関連する文章から帰納的に認識，学習者に規則を発見させるようにする（つまり，教科書ないしは教師は，文章と規則の間を「橋渡し」する）ことなどを述べているが，これらの特徴を総合的に，あるいはそれぞれ単独に含んだ教科書・教材が19世紀後半から次々と刊行されることになった。

著者は，この教授法を代表する教科書編者・教授学者として特にオウジェドニーシェク（Edward Ouředníček）を取り上げている。文献解題中にはオウジェドニーシェクの編集になる教科書は8点あり，その中に，自らの教授法について詳細な解説を付記し，また教科書の使用法と具体的な教室作業を教科書の前書きとして記したものが含まれている。本書の解説には全文は引用されていないが，幸いに評者はプシェロフのコメンスキー博物館で直接に目にすることができた。それによると，一つは1890年刊行の『中等学校1・2学年用ドイツ語練習』（原文はチェコ語のタイトル。文献目録番号285）の前書きで，チェコ語による解説の中にはドイツ人による教授学書からの引用が非常に多く，そのことからオウジェドニーシェクの教授法も，当時のドイツにおける言語教授法の潮流（ヴィエトーの著書を嚆矢とする外国語教育の改革運動）と無関係ではなかったろうと評者自身は推測する。もう一つはクラス内の作業を具体的に指示した，1914年刊行の『3年制中等学校1，2，3学年用ドイツ語練習』（原文はチェコ語タイトル。文献目録番号471）の前書きで，これは文献解題中に要約があるので，以下にそのまま記すことにする。

「教師が一つの文を読む。それを生徒それぞれが声に出さないでチェコ語に翻訳する。一人の生徒が教師に名指しされ，その文を大声で発声する。教師はその文を繰り返し，他の生徒を名指しし，その生徒が1，2回繰り返す。生徒はその課の新しい語彙を1，2回読み上げ，他の生徒はその意味を伝えるため，壁に張られた絵の中にそれを探す。こうしてすべての新語彙をチェックする。続く場面では，生徒は文章を1，2回読む。生徒はそれぞれ文章に関する質問を用意し，別の生徒の名を呼び，質問に答えさせる。このように質問が続けられるが，間違いは教師がすべて訂正する。生徒は正しい答を繰り返す。教師はあまり話さない。ヒントや指示は短く，かつドイツ語で与える。生徒も専らドイツ語で話し，チェコ語への翻訳はできるだけ少なくし，翻訳は生徒がテキストを理解するに効果があると確信した時に限る。発音練習では生徒は教師を真似る。真似るこ

とは，ドイツ語授業では重要な役割を演じるとして，このやり方をテキストの編者（オウジェドニーシェク）は直観法（Anschauungsmethode）と呼んでいるが，これは公式には，中道（なかのみち）教授法（Vermittelnde Methode）である。」（本書 240 頁）

スパーチロヴァーの論文[2]では，チェコ語学校（チェコ語を教授言語とする学校）のドイツ語の授業ではこの教授法が定着し，チェコ人の教授学者によって練り上げられ，ハプスブルク朝〈公認の〉教授法とされたとあり，その意味で Vermittelnde Methode は，チェコで開発されたこの教授法に対してつけられた名称ということになるだろう。

ただ，評者の調査の範囲ではあるが，Vermittelnde Methode という名のドイツ語名の教授法は，例えば 1921 年にドイツで出版されたアロンシュタインの言語教授法書[3]に取り上げられ，そこでは，ラテン語教育の伝統に従った文法翻訳法とヴィエトーが烽火を挙げたことに端を発する音声・口頭発表能力重視の教授法との間の，中道（なかのみち）を行く教授法とされ，内容の点でチェコで公認された教授法との差はあまりない。また，1993 年に同じくドイツで刊行された G. ノイナー／H. フンフェルトの『ドイツ語教授法入門』[4]にも，Vermittelnde Methode を論じた独立の章があり，これは文法翻訳法とオーディオ・リンガル法を結びつける教授法で，1950 年代のゲーテ・インスティトゥートにおける教授法がそれにあたる，とある[5]。これは，オウジェドニーシェクの時代の Vermittelnde Methode とは明らかに内容が異なる。また，スパーチロヴァー教授もチェコにおける Vermittelnde Methode と 50 年代のドイツのそれとのつながりを否定された（私信による）。

このように Vermittelnde Methode の名称が，ある時代の特定の教授観または教授法を指すものかどうかについての問題は残るが，少なくともスパーチロヴァー教授を初めとする本書の著者が，19 世紀の後半から 20 世紀にかけてチェコ内のドイツ語教育で広く採用され支持された言語教授法を他にはない独自のものとして認識し，それがなお今日も有効な言語教授法であると確信していることは，本書の随所から感じとることができる。

では，その確信は何に由来するのだろうか。それがコメニウス（コメンスキー）であることは，まず間違いない。

2) コメニウス（コメンスキー）

文献目録にはコメニウス自身の著作も勿論，数点取り入れられている。だが著者がとくに強調しているのは，多くの面で近代的であったコメニウスの教授法がその死後母国ボヘミアでは忘れ去られ，19 世紀の後半になってからチェコ人のためのドイツ語教育における教授法として復活・再生したことである。それは，典型的にはオウジェドニーシェクの教科書や教授法の中で実現し，さらにその他の教科書・教材にも取り入れられることになり，最終的にそれらを総称し，Vermittelnde Methode と呼ぶことになったのである。実際，先に挙げたような中道（なかのみち）教授法の特長は，コメニウスが『大教授学』で詳細に論じていることと大きく異なるものはない。また，オウジェドニーシェックの指示した教室での作業手順も，コメニウスの教授学の内容と大筋で合致する。どちらの場合もラテン語教育から生まれた文法翻訳法

への批判が一方にあるから，共通点があるのは当然であるが，19世紀のチェコにおける中道(なかのみち)教授法は，それがさらに直接法との対決を経ている点で，コメニウスの教授学が詳細かつ体系的，同時に理念的かつ理想主義的であるのと比べ，より現実的で実行可能なものだと言えるのかもしれない。それにしてもオウジェドニーシェックが，そして本書の著者が，それぞれの文頭に，コメニウスのことばをエピグラフとして掲げているのは，まことに象徴的である。

3) バイリンガル

著者によると，直接法はボヘミア・モラビアのドイツ語教育では定着しなかったという。スパーチロヴァー[2]には，直接法は19世紀の80年代には公認教授法として認定されたが20世紀最初の四半世紀にはフランス語教育でしか用いられなかった，とある。これは当時のボヘミア・モラビアがドイツ語とチェコ語の併用（バイリンガル）地域であったという言語事情と無関係ではないと思われる。直接法は母語の干渉を排除し，そして母語を学んだように外国語を自然に学ぶ，という手法を取るが，当時のチェコではそれはかえって「自然に反する」学習方法だったということであろう。

プシェロフのコメンスキー博物館で見たいくつかの教科書の本文では，例文の表示において各ページの左側がドイツ語，右側がチェコ語と，同じ大きさで互いに対応するように並べられているのが目についた。これらの例文を左右逆転し，もしそれにチェコ語の説明文がつけられているならば，それをドイツ語文に切り替えさえすれば，ドイツ人のためのチェコ語教科書になってもおかしくないであろう。その典型的なのは会話集といわれているもので，これも多くが目録に入っているが，チェコ人にもドイツ人にも共通に使えるようにしてある。このように，チェコにおける第2言語としてのドイツ語の教材や教授法は，チェコのバイリンガル的状況を考慮に入れなければ正確な理解は難しい。

4) 専門分野別教材

本書には教科書ばかりでなく単語集・辞書も含まれているが（499点中132点），19世紀後半からは，専門分野別の2言語併記の専門用語集が多く編纂される。例えば，「経済関係官吏用，獣医，技術者，林業・牧畜関係者，農業・湖沼関係者，園丁，土建・大工・左官，製粉業，醸造業を対象としたドイツ語ボヘミア語辞書」というのが1851年に刊行されているが，500頁近い辞書である。この他にも，仕立屋・裁断師・縫い子，桶職人，狩猟家，砂糖製造専門家対象といったものが編纂されている。

これらは，戦前の日本の外地においても専門分野別の教科書・教材が編纂されていたことを思い起こさせるが，多様さにおいて比較にならない。また，現代の日本語教育でも専門別の教授法や教材・辞書の必要が説かれるようになってから久しいが，主張されるわりには盛んではない。専門分野別教材の豊富さは，完全にバイリンガルではないがそれが必要とされた時代のボヘミア・モラビアの一般大衆レベルの言語状況を反映するもの，といえるだろう。

以上評者が今回行なったのは，文献解題の内容を具体的に紹介することよりも，それぞれの教科書・教材を支えている，あるいはそこから推測できる言語教授観，その時代背景，一般的特長を4点にまとめて提示したことである。結局は著者のまとめを踏襲し，確認する作業でしかなかったが，私的な感想ながら，日本語教授法との関係で強い共感と関心を抱き続けているコメニウスの教授学が，19世紀後半のチェコの第2言語教育の現場において再生し，幅広くとり入れられていた事実を本書によって初めて知らされ，深い感動をおぼえたことを最後に付記しておこう。

Helmut Glück/Holger Klatte/Vladimír Spáčil/Libuše Spáčilová
Deutsche Sprachbücher in Böhmen und Mähren vom 15. Jahrhundert bis 1918
Eine teilkommentierte Bibliographie
Walter de Gruyter・Berlin・New York 2002

注

1. *Die Volkssprachen als Lerngegenstand im Mittelalter und in der frühen Neuzeit*, Akten des Bamberger Symposions am 18. und 19. Mai 2001, (Hrsg.) Helmut Glück, Walter de Gruyter, Berlin/New York, 2002.
2. Libuše Spáčilová, Olmütz, *Deutsch-tschechische Lehrbuchtraditionen in den böhmischen Ländern von 1740 bis 1918*.
3. P. Aronstein, *Methodik des neusprachlichen Unterrichts*, 1921, Leipzig.
4. G. Neuner/H. Hunfeld, *Methoden des fremdsprachlichen Deutschunterrichts Eine Einführung*, 1993, Berlin.
5. 次の書にも Vermittelnde Methode について4と同様の説明がある。
   Bausch/Christ/Hüllen/Krumm (Hrsg.) *Handbuch Fremdsprachenunterricht*, 1989, Tübingen.